

詩集日本漢詩

春水遺稿
春風館詩鈔
春草堂詩鈔

山陽詩鈔
山陽遺稿
日本樂府

汲古書院刊

富士川英郎・松下 忠・佐野正巳編

詩集日本漢詩

第十卷

詩集 日本漢詩 第十卷(第一期第八回配本)

昭和六十一年十月 発行

定価八、五〇〇円

編者 富士川 英郎
松下 忠

佐野 正巳

解題 富士川 英郎

発行者 坂本 健彦

印刷 モリモト印刷株式会社

発行 汲古書院

102 東京都千代田区飯田橋二一五―四

電話(三六)九六四 振替東京五二五八〇三

©一九八六

解題

富士川英郎

本巻には頼一家の人たちの詩文集が収められている。

春水遺稿

著者

頼春水（一七四六—一八一六）、名は惟完、字は千秋、通称弥太郎、春水と号した。延享三年六月三十日、安芸国竹原に生まれた。父又十郎は諱を惟清と言ひ、亨翁と号した。和歌を嗜み、はじめは京都の馬杉亨安について学び、その没後は小沢蘆庵を師とした。母は道工氏仲。春水はこのふたりの間に生まれた長子である。明和元年、十九歳のときに疾を得、良医を求めて大坂に至ったが、たまたま堺で趙陶齋を識りその眷顧をうけた。その後、いったん帰郷したが、明和三年に再び大坂に出て、片山北海を中心とする詩社・混沌社に入つて、河野伯潜、葛子琴らと親交を結んだ。傍ら春水は江戸掘に家塾を開いて、子弟に教えていたが、天明元年に浅野侯に召されて、芸藩の儒官となり、広島に移り住んで、藩の学制の創建に尽力するところが多大であつた。また、世子の侍読として、しばしば江戸に來り、その間、尾藤二洲、古賀精里らの推輓によつて、昌平黌に出講したこともある。寛政の異学の禁が行われた際の立役者のひとりであつた。文化十三年二月十八日に七十一歳を以て歿したが、その弟に春風と杏坪があり、世に頼三兄弟と

して称せられたことは周知のところだろう。また、頼山陽は彼の子であった。春水の著書には、この『春水遺稿』に収められたもののほかに、『芸備孝義伝』（杏坪と共著）『春水掌録』等がある。

内容その他

文政十一年に、芸藩頼氏蔵板として刊行された。頼山陽が叔父杏坪の助言を得て、編集・校訂したものである。本篇十一巻と別録三巻、附録一卷、併せて十五巻（八冊）から成っているが、第一巻の巻頭に菅茶山と篠崎小竹の序文、頼杏坪の附言及び古賀精里撰の墓碑を掲げている。

巻一から巻八までに詩が収められているが、春水が若くして大坂に住んでいた頃の作からはじまって晩年のそれに及んでいる。これによって、その温雅平明な詩風を窺い知ることができるとともに、これらの編年体に編まれた詩は、一面、春水の伝記の好資料をなしているのである。

散文で注目すべきは、別録巻一と巻二の「在津紀事」である。これは春水が若くして大坂に住んでいた頃のさまざまな思い出を語った興味深い回想記である。春水が語るのを山陽が筆録したということであるが、混沌社の詩会や社友の人たちははじめとして、明和・安永の頃の浪華の人物や出来事を語って、目のあたりに見るが如くであると言っても過言ではない。江戸時代に漢文で書かれた随筆のうちで、この「在津紀事」は最も面白いものの一つであると言える。なお、明治十年に頼家から出版された『春水遺稿』別録巻二の末尾には、頼復・校として、「増補在津紀事」という十丁ばかりの附録が添えられている。これは篠崎小竹が「在津紀事」の欄外に標記した文字を集めたものであるが、小竹はこれらの軼事を主としてその養父たる篠崎三島から聞いていたのだろう。文中に「先人」とあるのは三島のことで、三島は嘗て混沌社の社中のひとりであった。このたび頼惟勤氏の御好意によって、この興味深い「増補」の記事を本巻に収めることができたのである。

別録卷三の「師友誌」は「在津紀事」の姉妹篇とも言うべきものであるが、春水はこの書の執筆を完了せずして歿し、山陽がその遺志をついで、その記事を整理し、補充したことは、この書の後記によって明らかである。卷末に「補遺」として附載された、尾藤二洲以下六名についての記事は山陽が執筆したものである。

因みに「在津紀事」と「師友志」は、嘗て『日本儒林叢書』第三卷（史伝書簡部）に収められて、活字となったことがある。

なお、この『春水遺稿・別録卷三』の末尾には、「先府君春水先生行状」という山陽の筆になるかなり詳細な春水の伝記が、附載されているが、そのなかに約二行半ばかり伏字になっている箇所がある（一四六頁上段）。流布した刊本においてはいずれもそうになっているが、初印本にはその伏字がないということで、このたび幸いに広島の頼家の御好意によって、この伏字の部分に相当する文章を知ることができた（写真参照）。それによれば、伏字にされたのは、「君素以方正見憚／一医官以滑稽進常狎戲諸臣／公曰逢頼某亦能如此耶宴見則呼以先生不名」という三十八字であったのである。これは藩主浅野公に関することなので、それを憚って、流布本においては敢て伏字にしたものと思われるが、ただ不思議なのは、この『春水遺稿』卷一の巻頭に載せられている古賀樸（精里）撰の「（春水）墓碑」のなかに、「素以方正見憚、有一弄臣常戲調諸臣、公曰逢頼某亦能如此耶、宴見則呼以先生弗名」（句点筆者）という右と大同小異の文字があつて（七頁下段）、これは伏字にされていないことである。右の「墓碑」は古賀精里が山陽撰の「先府君春水先生行状」に就いて、それを取捨しながら撰んだものと言われているが、精里は幕府の儒官であつたので、憚るところがなかったのだろうか。

『春水遺稿』の最後の巻は、「附録」として頼新甫の詩を収めている。新甫は巻頭に掲げられた「新甫墓碣」によつても知られる通り、もと頼春風の子で、山陽が廃嫡されたのち、伯父春水の養子となつたが、不幸にして僅か二十六歳の若さで死んだのであつた。

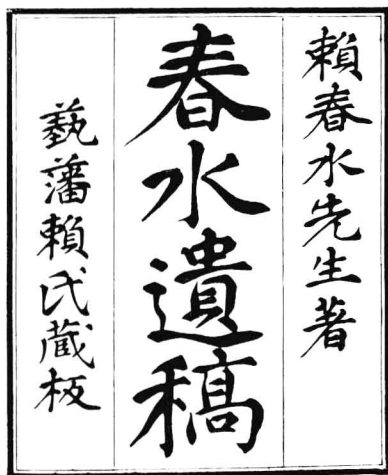
書誌

使用底本 汲古書院本 十一卷大五冊 但し、別録・附録三冊を欠く。そのためこの部分は慶応大学斯道文庫安井文庫本を借印した。また、「増補在津紀事」は頼惟勤氏藏本を借用した。ねずみ色表紙、題簽は四周単辺で「春水遺稿詩」(第一冊)。見返は黄色紙四周単辺で「山陽頼先生輯校／春水遺稿詩文／書林 文藻堂」。後半欠本のため奥附はない。第五冊末に文政十一年跋がある。56%縮小。

諸本

一、慶応大学斯道文庫安井文庫本 十一卷別録三卷附録一卷大八冊 縹色表紙で、題簽・見返・序跋などの収録順序は使用底本と同じ。奥附はない。刊年不明本とすべきか。

二、慶応大学斯道文庫浜野文庫本 十一卷別録三卷附録一卷大八冊 濃縹色表紙で題簽は使用底本とほぼ同じ。見返は左の通りである。



奥附は広金石韻府ほか十六種の書籍広告の末に「聖華房 山田茂助蔵」の書林名があるのみで刊記はない。

三、国会図書館本 124/31 十一卷別録三卷附録一卷大十二冊 黄色表紙で、題簽は使用底本とほぼ同じで、見返

は右浜野文庫本と同じ（黄色紙）。奥附は「広島中島本町／世並屋伊兵衛」の書林名があるが刊記はない。

四、国会図書館鵜軒文庫本 詩文 1709 十一卷別録三卷附録一卷大八冊 濃縹色表紙で、題簽は使用底本とほぼ同じ。

見返は浜野文庫本と同じ（赤色紙）。奥附も浜野文庫本に同じ。

五、静嘉堂文庫本 54／49 十一卷別録三卷附録一卷大八冊 縹色表紙で、題簽は使用底本とほぼ同じ。見返は浜

野文庫本と同じ（赤色紙）。奥附も浜野文庫本と同じである。

国書総目録によれば、文政十一年版・天保六年版・刊年不明版の三種があり、右五種は文政十一年版・刊年不明版に分類されているがいずれも刊記はない。見返から「文藻堂」版と「芸藩頼氏藏板」の二種に大別されるが、「序・後序・目録・墓碑・附言・跋・附録」などの順序は各本とも微妙に異なっており先後はつけ難い。ただし、国会図書館鵜軒文庫本と静嘉堂文庫本の二種は刷りがありよくないことから後印本であろう。

公親臨焉凡建學以來
公月三臨學執政以下非當直者皆從闔境翕然嚮
風自經史文翰不乏其人教道之盛前此未有云
先公嘗命一重臣釐累世文書君爲之副又蒙命與
千棋編輯藝備孝義傳凡大手筆事每屬焉丁卯加
祿三十石十年癸酉進徒士將領歩行之列職祿百
二十石并舊祿爲三百石 本藩待儒臣未有至此
而君自謂筋力衰憊坐享厚祿不堪忝竊因就重臣
言其意重臣諭
公所以酬功勞優耆老非素餐也君素以方正見憚

一 醫官以滑管進常狎戲諸臣
公曰逢頼某亦能如此耶宴見則呼以先生不名每
手書下問或屏人諮詢君亦感其知遇常念報効凡
事關君德知無不言自癸酉冬得水飲病亟作輟
公歎以中使存問如此三歲餘漸危篤猶命門人代
書陳學館事宜將沒命易其席南首北嚮蓋
公館在北死弗敢背君也終沒年七十一實文化十
三年丙子二月十九日也葬于廣島府城東南比治
山安養院君爲人軀幹不偉而望之有威短面廣額
眼彩炯然性剛方峻整雖妻子未嘗見其有惰容衣

君府先 尾録別 稿遺春 水所藏 氏郎三 桃頼 春水先生行狀 第7丁書影(本文146頁参照)

春風館詩鈔

著者

頼春風（一七五三—一八二五）は通称を松三郎と言い、名は惟疆、字は叔義、または千齡と言い、春風と号した。享翁の次子で、春水の弟、杏坪の兄である。宝暦三年に安芸国竹原に生まれた。明和三年、十四歳のときに兄春水に従って大坂に至り、古林見宜の門に入って、医術を学んだが、傍ら当時、同塾の儒学講師であった尾藤二洲と相い識って、親交を結んだ。安永二年、竹原に帰って、病身の父に仕えながら、医業を行い、以後はこの郷里にあって悠々自適の生涯を送ったが、晩年には芸藩の藩医に推されて、禄を賜った。彼らの若かった頃、友人たちが頼三兄弟を評して、春水は方、春風は円、杏坪は三角だと言ったというが、これはいかにも適評であつたらしい。文政八年九月十二日に歿した。享年七十三歳であつた。

内容その他

天保十二年に嗣子元彝が編集して、刊行した。巻頭に篠崎小竹の叙文を掲げ、巻尾に尾藤二洲の「爽氣樓記」と古賀精里の「題竹原書院詩巻後」を添えている。この詩集は上下二巻から成っているが、詩の配列はだいたいにおいて、年代順になっているようである。即ちそれは春風が若くして大坂に滞在していた頃に作られた詩からはじまって、晩年のそれに及んでいるのである。春風のこれらの詩は概して個性味に乏しい憾みがあるが、その俗気のない清韻には掬すべきものがある。それは彼が詩を以て立とうとする野心を少しも持たず、自然に興がわいたときにだけ、作詩の筆をとっていたからなのだろう。こうして彼の詩は期せずしてその温雅な人柄を反映しているのである。

書誌

使用底本 頼惟勤氏蔵本 二巻大二冊 縹色表紙で、題簽は四周単辺「春風館詩鈔 上」(第一冊)。見返・奥附はない。57%縮小。

諸本

一、静嘉堂文庫本 54/49 二巻大二冊 縹色表紙で題簽は使用底本とほぼ同じ。見返は黄色紙で、「天保辛丑新刊」と上部欄外に横書きし、「頼千齡先生著／春風館詩鈔／爽気楼蔵版」。奥附は「江戸須原屋茂兵衛以下大坂河内屋吉兵衛」まで三都の書林七軒の連名となっている。

二、国会図書館本 213/127 二巻大二冊 縹色表紙で、題簽は使用底本にほぼ同じ。見返・奥附はない。

三、国会図書館鶚軒文庫本 詩文 1719 二巻大一冊 縹色表紙で書き題簽。見返・奥附はない。

国会図書館本は使用底本と同一で刷りも良く両者とも初印本に近いと思われる。そして静嘉堂文庫本・鶚軒文庫本の順となり、鶚軒文庫本の刷りは非常に悪い。なお、静嘉堂文庫本の収録順序は他本と若干異なっている。なお、大正十三年六月に曾孫頼俊直氏が題跋を付して刊行した影印版二巻一冊がある。

春草堂詩鈔

著者

頼杏坪(一七五六―一八三四)、名は惟柔^{たかしな}、字は千祺、一字は季立、通称は万四郎で、はじめ春草と号し、のちに杏坪と改めた。宝暦六年、安芸国竹原に生まれた。享翁の第四子で、長兄に春水、次兄に春風があった。杏坪は安永九年、二十五歳で大坂に遊学し、兄春水のもとにあったが、春水が天明元年に広島藩に聘せられて、藩儒となると、杏坪は

翌二年に嫂の梅颯や姪の山陽を伴って、大坂から広島へ移った。三年、兄春水が藩侯の世子の侍読として江戸に赴いたとき、杏坪もそれに随行して江戸に至り、闇齋学派の服部栗齋について学んだ。五年、広島藩の儒者となり、寛政九年以後は兄春水に代って、世子の侍読として、しばしば広島と江戸の間を往来した。文化八年に杏坪は拔擢されて、御納所奉行上席郡御役所詰となり、学問所を離れて、藩の政務に携わるようになった。そして十年には五十八歳で三次、恵蘇二郡の代官に任ぜられたが、その治績には見るべきものがあつたという。天保五年七月二十三日、享年七十九歳で歿した。その著書に『原古編』『芸備孝義伝』（春水と共著）『芸藩通志』等がある。

内容その他

天保四年に京都の菱屋、大坂の河内屋、広島のみ屋の連名で刊行された。全八卷（四冊）から成り、篠崎小竹の序文を巻頭に掲げ、後藤松陰撰の跋文を巻尾に附しているが、松陰は第九卷の「解題」のなかで記したように（第20頁参照）、名は機、字は世張、通称俊蔵または春蔵で、松陰と号した。京都で頼山陽に学び、のち大坂で塾を開いたが、頼山陽の媒妁によって、篠崎小竹の女婿となった。

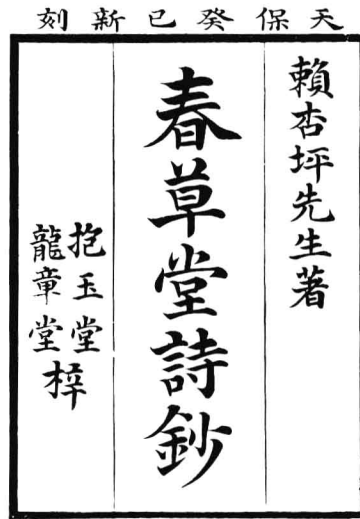
この『春草堂詩鈔』には文化年間から天保に至る古今体の詩及び詩餘が、通計して六百二十一首収められており、その欄外には菅茶山、頼山陽、篠崎小竹、後藤松陰らの興味深い評言が記載されている。

頼三兄弟のうちでは、杏坪が最も学者らしかったと言ってもよいが、その詩もまた学者らしく、しばしば難しい文字が使用され、奇語、僻語の類がひんばんにそこに現われて、人を驚かすのである。彼の詩には咏物叙景の詩が少く、記述や叙事の類が多い。雅趣と余韻を尊ぶというよりは、むしろ雄弁を誇り、話術の妙を楽しんでいるかのようである。巻一の末尾で、菅茶山が杏坪の詩を評して、「千祺は既に前輩の大声壮語に非ず。又た今時の飢餓^{いへ}軽俳と異なる。特にその遭う所を述べて、意至り、筆随う。民艱吏情、曲丁肯綮、伝奇小説と雖も言い易からざる所、然も諸^{もろ}を詩律

に入れて、優游餘綽、語近にして俚ならず、意深くして鑿せず、まこと洵に前に古人の鳴無しと称すべし。また奇なり」と言っているが、これはまさに適評と言うべきだろう。

書誌

使用底本 汲古書院本 八卷大四冊 縹色表紙で、題簽は四周单边「春草堂詩鈔 一」（第一冊）。見返は次の通り。



奥附は「天保五年甲午十月」に続いて「京都菱屋孫兵衛以下大阪河内屋徳兵衛」まで書林六軒の連名となっている。
52%縮小。

諸本

一、慶応義塾図書館本(A) 151—101—4 八卷大四冊 縹色表紙で、題簽・見返とも使用底本と同じ。奥附は四書松陽講義ほか十二種の書籍広告の後に「浪華書林 抱玉堂河内屋徳兵衛蔵版」とある。見返にある抱玉堂の発売本で、天保四年版である。

二、慶応義塾図書館本(B) CL—D—2—8—10 八卷大四冊 縹色表紙で、題簽・見返・奥附とも使用底本と同

じ天保五年本。

三、国会図書館鵜軒文庫本(A) 詩文 1702 八卷大四冊 使用底本と同じで、天保五年本。

四、国会図書館鵜軒文庫本(B) 詩文 1703 八卷大四冊 縹色表紙で、題簽・見返とも使用底本と同じ。奥附は「嘉永四年辛亥五月補刻／大坂書林／河内屋徳兵衛／近江屋平助」となっている。

五、静嘉堂文庫本 54／49 八卷大四冊 縹色表紙で、題簽は四周双辺「纂評春草堂詩鈔 天」(第一冊、以下地玄黄)。見返(黄色紙)は次の通り。



篠崎小竹の序がなく、奥附は三都発行書林として「京都出雲寺文次郎以下大坂近江屋平助板」まで十軒の連名となっている。明治に近い後印本であろう。

六、国会図書館本 244／158 八卷大四冊 香色表紙で、題簽・見返(赤色紙)は右の静嘉堂文庫本と同じ。やはり

篠崎小竹序がなく、奥附は「皇漢洋書物商／大阪書林／大阪府平民／柏原政治郎」とある。明治版である。

国書総目録には、天保四年・天保五年・嘉永四年・刊年不明版の四種が著録されている。

山陽詩鈔

著者

頼山陽（一七八〇—一八三二）、名は襄^{のほろ}、字は子成、通称は久太郎、山陽、三十六峰外史と号した。安永九年十二月二十七日、大坂江戸堀一丁目に生まれた。父は春水、母は静（梅颯）である。天明元年の暮、父春水が広島藩の藩儒となり、山陽は翌天明二年に母及び叔父杏坪につれられて、大坂から広島に移った。山陽は幼い頃から杏坪について経書を学び、早く詩文を作って、その夙才ぶりを発揮したが、躁鬱病の発作が現われたのもまた、その少年時からのことであつた。寛政九年、十八歳にして山陽は叔父杏坪に従つて江戸に赴き、尾藤二洲や服部栗斎に学んだが、翌十年には同じく杏坪に伴われて広島に帰った。十二年に大叔父伝五郎の死を弔問するために竹原へ向う途中、出奔して所在を晦ましたが、発見されて、広島へつれもどされ、その後満三年間、幽閉された。文化元年廃嫡され、六年、神辺の菅茶山の廉塾の都構となつたが、八年に神辺を去つて、京都に向い、それ以後、文政元年に九州へ大旅行をしたほかは、京都にあつて、徒弟に教えながら、官羈されない自由な文人として生涯を送つた。天保三年九月二十三日、享年五十三歳を以て歿した。著書には、本巻に収められたもののほか、『日本外史』『日本政記』『通議』『山陽文稿』その他多数ある。

内容その他

天保四年に、弟子後藤機（松陰）の校訂を経て、刊行された。全八巻（四冊）から成り、巻頭に篠崎小竹の序文を掲げ、巻尾に後藤松陰の跋文を載せている。詩は寛政五年、山陽十四歳のときの作からはじまり、文政八年、四十六歳のときのそれに至っており、古今体の詩六六二篇が年代順に配列されているが、これらの詩篇は、山陽自身がその

生前に自ら選んで、書肆に手渡したものである。従って彼として一応自信のある作がここに集められていたが、彼はこの詩稿を書肆に渡したのちにも、なお一層の厳選をしたいという意向をもっていたらしい。彼は天保三年八月二十六日付で後藤松陰にあてた手紙のなかで、

「時二河（内屋）儀助出版の拙集も、関心之一也。第二三冊、西遊冊之外・未刻処のさしてもなき詩は、板下料を損にして、ぐつとへし、其以後、数年の詩を合刻シタキモノ也。何則西遊後さしてもなき詩多し（二冊ホドニナルベシ）。丙戌・丁亥・戊子・己丑、庚寅五六歳之詩多_ニ傑作_一矣。」

と言っているが、これは既に書肆に原稿を渡してある『山陽詩鈔』全八巻のうち、巻一、二の初期詩稿や、巻三、四の西遊詩はそのままよいが、巻五から巻八までの詩のうちにはそれほどでもないものがまじっているので、もしも既にそれらが版刻されていたら、版刻料を損してもよいから、それらの詩を思い切って減して二巻ほどに縮め、その代り、文政九年以後の詩をそれに加えたい。なぜなら文政九年以後の詩には傑作が多いのだからという意味なのだろう。しかし、このときには既に版刻が進んでいたし、山陽自身もやがて死んでしまったので、彼のこの意図は実現されず、『山陽詩鈔』は最初の計画通り、寛政五年から文政八年までの詩を収めて刊行され、文政九年以後の詩はのちに『山陽遺稿』のなかに収められたのであった。

なお、篠崎小竹がこの詩鈔に寄せた序文を山陽はその病歿する十二日前に受取った。そして彼は病床にあつて、これを読んだが、感激のあまり、その小竹の文章に傍点や傍線を施したり、雌黄を加えたりしたほか、その末尾に、長い感想文を書きつけた。『山陽詩鈔』の刊本には、その山陽の雌黄のあとも、感想文もそのままに版刻されているが、これは山陽がいかに自選の詩集に愛着していたか、そして強い自信をそれに持っていたかを語るものだろう。いずれにしても、「子成（山陽）……曠世之才を以て、雄偉之詞を逞_{たくまし}うす。体は古今を兼ね、調べは唐・宋に無く、応酬の常套を畧し、而して咏懐の蓄念を発す。典故を和漢に合わせ、議論を風雅に寓す」という小竹の評言は、山陽自身もま

た、ひそかに肯定するところであつたらしい。これに対して彼は、「その溢、愧ず可しと雖も、亦た受くるを辞せざるもの有り」と言っているのである。

書誌

使用底本 故長澤規矩也先生藏本 八卷大四冊 縹色表紙で、題簽は四周单边「山陽詩鈔 一」(第一冊)。見返(黄色紙)は四周单边「天保癸巳新鐫／山陽詩鈔／書林五玉堂藏」。奥附「天保四年癸巳三月発兌」に続いて、「京都菱屋孫兵衛・芸州広嶋米屋兵介以下大阪河内屋徳兵衛」まで六軒の書肆連名となっている。三冊目卷六末に他本になり「続聯珠詩格」ほかの広告一丁がある。50%縮小。

諸本

一、汲古書院本 八卷大四冊 使用底本と同じ、但し広告はない。

二、内閣文庫本(A) 206／273 八卷大四冊 使用底本と同じであるが奥附はない。第四冊末に「浪華書林岡田種玉堂

藏板書目／河内屋儀助」で始まる広告五丁が付されている。刷りは非常によい。初印本か。

三、静嘉堂文庫本 54／49 八卷大四冊 使用底本と同じ。但し第四冊末の後序が第一冊序の次に入っている。

四、国会図書館鶯軒文庫本(A) 詩文¹³²⁰ 八卷大四冊 使用底本と同じ。但し後印本。

五、国会図書館鶯軒文庫本(B) 詩文¹³²¹ 八卷大四冊 使用底本と同じであるが、奥附は「安政三丙辰年改正／三都

書肆／江戸須原屋茂兵衛以下大阪河内屋和助板」まで五軒連名となっている。安政三年本。

以下は明治版であるが参考に掲げる。

六、国会図書館本 183／162 六卷中四冊 使用底本と異版。濃縹色表紙。題簽は四周双辺「山陽詩鈔 一」(第一冊)。

見返(赤色紙)は四周双辺「頼襄子成著／山陽詩鈔／天保癸巳新鐫・明治戊寅十一月翻刻」とあり、奥附は「明

治十一年十二月一日出版／翻刻出版人 東京府平民 牧田態次良」となっている。

七、内閣文庫本(B) 206／274 六卷中四冊 右国会図書館本と同一本。

八、内閣文庫本(C) 206／279 六卷中四冊 見返は四周双辺で「頼久太郎編輯／山陽詩鈔／慶雲館反刻」とあり、奥

附は「明治十二年十月刻成／翻刻出版人 愛知県平民 栗田東平」となっている。巻建ては六／八とも同じである。

九、内閣文庫本(D) 206／280 八卷中四冊 他と全くの異版、但し巻建ては使用底本に同じ。題簽は四周双辺「反山

陽詩鈔頼久太郎著」(第一冊)。見返は四周双辺「頼襄著／山陽詩鈔／双玉房反刻」。奥附は「明治十二年一月出版／反刻人 大阪府平民 浜本伊三郎・平野藤七」

十、内閣文庫本(E)(F) 206／288・206／283 八卷大四冊・八卷中四冊 他と全くの異版、但し巻建ては使用底本と同じ。題簽は四周双辺で「評山陽詩鈔 壹」(第一冊)。見返は、「頼久太郎著・後藤松陰評註 全四冊／山陽詩鈔／浪華

三書房藏」。奥附は、「明治十六年四月出版／著者 故人 頼久太郎／評註者 故人 後藤松陰／出版人 大阪府平民 柳原喜兵衛・田中太右衛門・松村九兵衛／発兌人 岡田茂兵衛」となっている。

国書総目録によれば以上のほかに弘化三年本と嘉永四年本があると著録されている。江戸時代のみならず明治に入ってもいかに広く読まれたかが知られる。

山陽遺稿

著者

頼山陽(前出)。